

## 関孝和の実母・湯浅家の研究

-安藤家の『泰翁様御代高崎江戸給人帳』『万治元（1658）年江戸高崎給帳』

A Study of Seki Takakaza's Mother, Yuasa Family

-The “Yasu-o sama Ontai Takasaki Edo Kyujin Cho”, “Edo Takasaki Kyu Cho, 1658” at Lord Ando-

大阪教育大学 国際センター 城地 茂 (Shigeru JOCHI) <sup>1</sup>

International Center, Osaka Kyoiku University

### 1. 緒論 関家と内山家の伝記的研究

関孝和 300 周年記念を期に関孝和の伝記研究が盛んになり、従来の研究に加え、『（浄輪寺）過去帳』『御家人分限帳』『甲府日記』（中川忠英、1803 年）らの発見、再確認により、関孝和の伝記がかなり明らかになってきた。『寛政重修諸家譜』『断家譜』『（寛政 12（1800）年）関孝和略伝』といった系図の研究に加え、『甲府様御人衆中分限帳』『御府内沿革図書』や『諸向地面取調書』<sup>2</sup>といった地図も含めた史料が紹介された。

関新助（別の通称、弥右衛門？<sup>3</sup>）孝和（1645?<sup>4</sup> - 1708）の実家・内山家は信濃国の出身で、武田家の武将・蘆田右衛門佐信蕃<sup>あしたのぶしげ</sup>（1548-1583）に仕えたが、後に徳川家に仕え、徳川忠長（1606-1634）付きとなった。忠長の失脚後は、野に下ったが、俸禄はもらっていたようである。そして、藤岡に住んでいるときに、安藤家家臣の湯浅与左衛門の娘と結婚し、長男の永貞（1637?-1708）が生まれている。

安藤家は、老中を輩出しうる石高であり、この時の当主・安藤重長<sup>しげなが</sup>（1600-1657、藩主 1621-1657）も寺社奉行や奏者番を歴任している。忠長の家臣の行く末が、暗いものではないことが予見できていたのかもしれない。少なくとも、忠長の家臣には累が及ばないということで、湯浅家の婚儀を認めたのだろう。

この予見は正しく、1639 年には、内山永明（?-1662）が天守番として江戸に召還されている。名実共に番方の御家人となったのである。

---

<sup>1</sup> 大阪教育大学国際センター教授。jochi@cc.osaka-kyoiku.ac.jp

<http://www.osaka-kyoiku.ac.jp/~jochi/>

<sup>2</sup> 城地 茂（2009）「関孝和の数学と勘定方の住居-『楊輝算法』『甲府様御人衆中分限帳』『御府内沿革図書』と『諸向地面取調書』にみる幕臣の感性」を参照されたい。

<sup>3</sup> 真島秀行（2009）「関新助孝和のある甲府分限帳の記載について」参照。なお、牛込天龍寺跡に居住していたの関家当主の通称は弥四郎であり、関の通称と同じ「弥」の文字がある。

<sup>4</sup> 従来は、1642 年説があったが、真島秀行（2009）「関新助孝和のある甲府分限帳の記載について」で、1645 年説を提出した。

<sup>5</sup> 依田という姓もある。

関孝和は、1645年はもちろん、1642年頃3月に生まれた<sup>6</sup>としても、江戸生まれになる。小石川生まれという説もある<sup>7</sup>が、これは、内山七五郎永清（長兄・永貞の曾孫）の別邸が小石川に1740年から1810年にあったため、このように誤解され、明治期の数学史家によって伝えられたのかもしれない。<sup>8</sup>

内山吉明（1556?-1646）-勝行院妙珠信女<sup>9</sup>（-1647）-永明（永清）（-1662）

=永明（-1662）	-永貞（1637?-1708）	-高永（1675-）	-永諸 <sup>10</sup> （1690-）
	-関新助孝和（1645?-1708）	-妙想童女（-1686）	
		-夏月妙光童女（-1698）	
		=平蔵 <sup>11</sup>	
		=新七郎久之（1690-）	
	-永行 <sup>12</sup> （-1710）	-新七郎久之（1690-）	
	-永章 <sup>13</sup> （1661-1725）		
	-重（繁） <sup>14</sup>		
	-本龍院妙雲日勝信女 <sup>15</sup> （-1703）		

## 表1 内山家系図

ここでは、従来、名（諱）不詳とされていた、関孝和の養子、新七郎の久之という名に注目したい。『断家譜』巻30:205に、久之と明記されているのだが、『断家譜』では、通称が新七となっていたため、信憑性が疑われていた。

<sup>6</sup> 1642年3月という記述は、九一山人（山口県人、仮名か）『数学報知』1893年11月が初出である（三上義夫（1932）「関孝和傳記の新研究の概要」489:340-341）。

<sup>7</sup> 川北朝鄰（1890?）「本朝数学家小伝」にあるという（三上義夫（1932）「関孝和傳記の新研究の概要」489:344、平山諦（1959）『関孝和』:21）

<sup>8</sup> 高柳光寿（他編）（1964-1967）『寛政重修諸家譜』vol. 13:101, 103。

<sup>9</sup> 安間三右衛門国重の妻。『過去帳』に「勝行院妙珠信女 内山七兵衛祖之母」とある。正保3（1703）年6月17日没（真島秀行（2009）「関孝和三百年祭に明らかになったこと」:6）。

<sup>10</sup> 通称は左京、『御家人分限帳』巻9（鈴木寿（校訂）（1984）『御家人分限帳』:225）では、大番士であった。なお、『御家人分限帳』の人名登録年度は、1702年から1712年間で、1705年が49%、1709年が23%（鈴木寿（校訂）（1984）『御家人分限帳』:11）である。

<sup>11</sup> 宝永2（1705）年6月10日にお目見えしているが、その後は不明。内山永章の通称が平助であり、似ているが、その関係は不明。

<sup>12</sup> 通称は新五郎。松軒と号す。医師であった。『御家人分限帳』には記載がない。

<sup>13</sup> 甲府藩時代の通称は平助、関東勘定衆時代の通称は小十郎。「西（1705年）四十五」（『御家人分限帳』巻11、鈴木寿（校訂）（1984）『御家人分限帳』:294）とあり、1661年生まれである。

<sup>14</sup> 三上義夫（1932）「関孝和傳記の新研究の概要」488:343。

<sup>15</sup> 『過去帳』に「本龍院妙雲日勝信女 元禄十六未（1703年）三月三日 内山氏姉」とある（真島秀行（2009）「関孝和三百年祭に明らかになったこと」:7）。

しかし、『断家譜』は、江戸時代の系図研究者、田畑喜右エ門吉正<sup>よしまさ</sup>（1770-1845）が1809年に纏めた物で、信頼できるものである。しかも、ここには、関新七郎の所属が「小普請大久保淡路守（教福）組」とあり、これは、『御家人分限帳』<sup>16</sup>巻17<sup>17</sup>の記載と合致している。したがって、久之という名も可能性があると言える。

また、『甲府日記』など浅草文庫から内閣文庫となり現在は国立公文書館に所蔵される公文書の写しなどから、関孝和の生年や甲府藩での経歴が明らかになりつつある<sup>18</sup>。そこで、本稿では、関孝和の生年前後の記録を母方の実家・湯浅家の記載された史料を紹介したい。外祖父にあたる湯浅与左衛門は、25 俵から 35 俵の高崎詰めの高崎藩士であった。

## 2. 安藤家中に伝わる分限帳

高崎は、現在でも信越線、上越線の分岐点であり、交通の要所である。江戸時代は、北方からの備えとして譜代の大名が配されていた。歴代の藩主も、井伊家（譜代 12 万石）、酒井家（譜代 5 万石）、戸田松平家（譜代 2 万石）、藤井松平家（譜代 5 万石）、安藤家（譜代 5 万 6 千石）、大河内松平家（譜代 5 万 2 千石→6 万 2 千石→7 万 2 千石）、間部家（譜代 5 万石）、大河内長沢松平家（譜代 7 万 2 千石→8 万 2 千石）とめまぐるしく変わっているが、これは老中などの要職を輩出するため、その結果加増などにより国替えが行われたためと考えられる。

関孝和の生まれた頃は、安藤重長<sup>19</sup>（1600-1657、藩主-1621-1657）が高崎藩主であった。この間、寛永 9（1632）年には改易となった徳川忠長（1606-1634）を預かり、高崎城に幽閉するという事件が起きている。そして、内山家は、忠長に仕えており、藤岡に隠遁していたのである。

安藤家は、安藤重信（1557-1621）が、下総国小見川藩（1 万 6000 石、陣屋）で大名となり、元和 5（1619）年、上野国高崎藩 5 万 6,000 石及び近江国山上藩 1 万石（城主）へ加増移封された。二代目の重長の時代に、上記の忠長事件により、内山家と関わりをもつことになる。その後、備中国松山（6 万 5000 石、城主）、美濃国加納（6 万 5000 石、城主）、と有能な譜代大名の常として度々国替えになり、最後は、陸奥磐城平（6 万 7000 石、城主）で幕末を迎えている。

高崎藩時代の分限帳も福島県いわき市まで伝わり、旧藩士の親睦会である平安会に伝わっていた。2006 年に安藤氏の磐城平入府 250 年記念により、特別展が開かれ、こうした分

<sup>16</sup> 正徳 2（1712）年-享保 10（1725）年ごろ編纂。活字本は、鈴木寿（校訂）（1984）『御家人分限帳』。

<sup>17</sup> 鈴木寿（校訂）（1984）『御家人分限帳』：497。

<sup>18</sup> 真島秀行（2009）「関新助孝和のある甲府分限帳の記載について」

<sup>19</sup> 忠長事件後、書院番頭、寺社奉行、奏者番などを歴任している。

限帳が一同に集められたため、調査に好都合であった。

外祖父・湯浅氏の記述のあった分限帳は、3部あった。

(1) 『江戸高崎分限帳』(万治元戊戌(1658)年6月16日改、真木文書)

(2) 『江戸高崎給帳』(万治元(1658)年、宝暦6<sup>20</sup>丙子(1756)年3月吉日写、漆原文書)

(3) 『泰翁様御代高崎江戸給人帳』<sup>21</sup>(弘化3(1846)年閏5月、四家福備<sup>22</sup>写)の3部であり、(2)は(1)の写しと考えられる。

(3)は、写した年代はもっとも新しいが、「泰翁様」とは、安藤重長が藩主だった1621-1657年の記録であり、内容は最も古く、関孝和の外祖父の時代の記録である。

### 3.湯浅氏の記録

『泰翁様御代高崎江戸給人帳』27丁裏には、

高崎の部

一、同(高)三拾五俵 外式人扶持 湯浅与次右衛門

と記載されている。ここでは、『寛政重修諸家譜』に記載されている「湯浅与左衛門」ではなく、「湯浅与次右衛門」となっている。石高は、35俵2人扶持である。



図1 『泰翁様御代高崎江戸給人帳』 27丁裏

<sup>20</sup> 平へ入封の年。

<sup>21</sup> 四家久央氏蔵。安藤重長(1600-1657)が藩主だった元和7年(1621年)-明暦3年(1657年)のものと考えられる。なお、安藤家は代々、対馬守となっているが、重長の官職は、右京進である。寛永9(1632)年に改易となった徳川忠長(1606-1633)を預かり、高崎城に幽閉した。『磐城平藩と安藤家展』(2006年)pp.23-24(写真はp.11)に出展番号46として『泰翁様御代高崎江戸給人帳』の表紙写真が記載されている。

<sup>22</sup> 四家又左衛門の養子又兵衛福備。(『磐城平藩と安藤家展』:23)



図2 安藤重長 (1600-1657) 肖像画<sup>23</sup>



図3 安藤重長墓 (良善寺<sup>24</sup>)

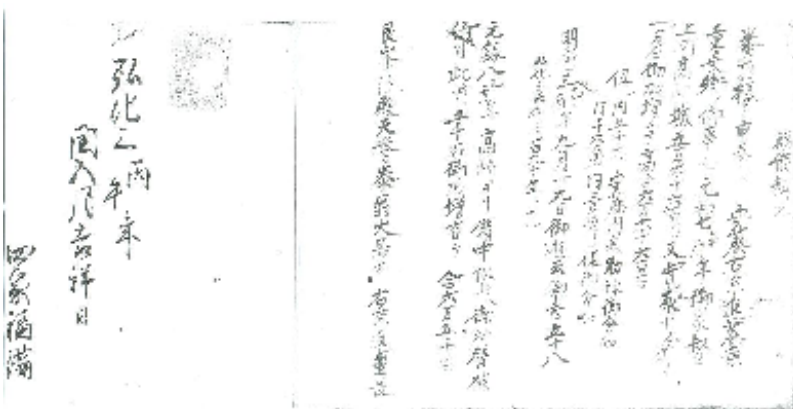


図4 『泰翁様御代高崎江戸給人帳』後書



図5 四家福備像

なお、高崎の部に 200 石で「関 半兵衛」の名が見えるが、関孝和とは無関係のようである。

『江戸高崎分限帳』(万治元戊戌 (1658) 年 6 月 16 日改) には、

「式拾五俵外二人扶持 湯浅与左衛門」

とある。

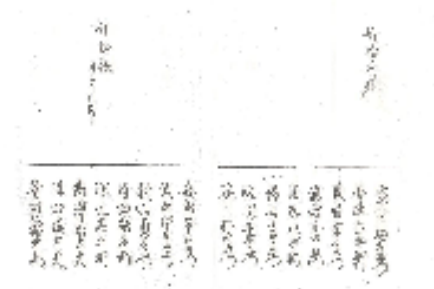


図6 『江戸高崎分限帳』(1658年)

<sup>23</sup> 「ふくしま教育情報データベース いわき市の文化財 市指定有形文化財 (歴史資料)

あんどうしげなが  
安藤重長画像」明暦丁酉内 (1657) 年良峯院殿前京兆司録天誉泰翁居士尊儀九月二十九日 (重長の命日) と墨書がある。指定平成 13 (2002) 年 4 月 27 日、良善寺蔵、縦 134 cm、幅 41 cm。  
<http://www.db.fks.ed.jp/txt/10090.002/html/00182.html>

<sup>24</sup> 福島県いわき市平字古鍛冶町 107 にある安藤家の菩提寺である。2009 年 2 月 7 日撮影。

写しと考えられる『江戸高崎給帳』（万治元（1658）年 宝暦 6 丙子（1756）年 3 月吉日写、漆原文書 49 丁表にも同様に、

「一、高弐拾五俵外二人扶持 湯浅与左衛門」

とある。



図 7 『江戸高崎給帳』（1658 年）49 丁表

1657 年ごろに「湯浅与左衛門」が 25 俵 2 人扶持であったのである。関孝和が生まれたのが 1645 年頃とすれば、この「湯浅与左衛門」が外祖父に当たる可能性は低い。史料どおりに読めば、外祖父は、「湯浅与次右衛門」で、石高は、35 俵 2 人扶持である。代替わりして、「湯浅与左衛門」が 25 俵 2 人扶持になったと考えるのが自然である。

これらの史料だけで断定するのは難しいが、外祖父は、湯浅与左衛門ではなく湯浅与次右衛門であった可能性がある。

また、この湯浅氏であるが、安藤家が磐城平に入府した頃の『新版改正 安永武鑑磐城諸士衆』<sup>25</sup>（安永 2（1773）年 11 月）には、湯浅という史料は見られなくなっている。また、現在の平安会の会員に湯浅姓はなく、安藤家が磐城平に入府したころには、断絶してしまったか、あるいは、高崎に残留してしまったようである。なお、高崎付近には湯浅姓が少なくないので、高崎の地縁のある武士だったのかも知れない。

また、25 俵から 35 俵という石高であるが、幕府直参の場合、同心クラスであるが、高崎藩では、徒クラスである。これは、『安永武鑑』<sup>26</sup>（1773）には、

卷 1、諸士衆（200 石以上）15 家

<sup>25</sup> 『いわき史料集成』2:167-260、影印本収録。いわき市内郷白水町・菊池康雄所蔵。「解題」、『いわき史料集成』2:350-351。安永 2（1773）年 11 月 原弥十郎、天保 14（1843）5 月、榊原貞正（写）、嘉永 6（1853）年浜野章一（写）。

<sup>26</sup> いわき史料集成刊行会（1987）『いわき史料集成』2:167-260 所収『新版改正安永武鑑磐城諸士衆』安永 2（1773）冬 11 月改之、天保 14（1843）癸卯年中夏、嘉永 6（1853）癸丑 9 月、原弥十郎、榊原貞正、浜野章一。

卷2、御給人以上<sup>27</sup>（100石以上、40俵以上）33家。勘定奉行・野田源五左衛門 40俵 2人扶持

卷3、御役人衆

勘定奉行 野田源五左衛門 40俵 2人扶持

小葉武左衛門 70俵

河野儀左衛門 100石

勘定人 齋藤仙次良 20俵 2人扶持、齋藤恍？之進 20俵 2人扶持

背？沼寧助 2人扶持、西脇東蔵 2人扶持

山中弥五郎 15人扶持、九里小一郎 40俵 2人扶持

祭主郡平 2人扶持、佐藤弥富 50俵

下河辺市右衛門 2人扶持、佐川与五右衛門 20俵 2人扶持

空白、井沢柳？治 2人扶持

とあり、卷3の平勘定クラスの石高であるのが分かる。

待遇面では、内山家と近いものであり、幕臣とはいえ忠長事件に連座しかねない状況の内山家とでは、ある意味投機的な婚姻とも考えられよう。

このように、関孝和の実母の実家は、30俵内外の高崎藩士だったという事が言える。

実母は、高崎藩（安藤家）士・湯浅与右衛門<sup>28</sup>の娘（是精院妙進日行信女）で、1711年2月14日に亡くなっている<sup>29</sup>。なお、養母（関五郎左衛門（十郎右衛門）の妻）は、茂菴貞繁信女<sup>30</sup>で、天和2（1682）年3月29日に亡くなったようである。

以上のように、安藤家の分限帳からは、関孝和の外祖父と思われる人物は、湯浅与左衛門ではなく、湯浅与次右衛門の可能性が高い。『寛政重修諸家譜』の記録と異なる可能性が高い。また一つ、『寛政重修諸家譜』の記述の疑問点が現れたといえよう。

<sup>27</sup> 名字帯刀を許されたもの。

<sup>28</sup> 『泰翁様（安藤右京亮重長（1600-1657、藩主 1621-1657））御代江戸・高崎給帳』（四家福備（写）、弘化3（1846）年閏5月、四家久央氏所蔵）27丁裏に、「一、同（高）三拾五俵 外式人扶持 湯浅与次右衛門」とある。また、『万治元（1658）年江戸高崎給帳』（漆原氏、宝暦6（1756）年、松井延之氏提供）50丁表には、「一、高二拾五俵 外式人扶持 湯浅与右衛門」とある。この人物が、関孝和の実母の父である。城地茂（待出版）「関孝和の実母」参照。

<sup>29</sup> 『過去帳』に「是精院妙進日行信女 内山小十良（郎）母」とある。宝永8（1711）年2月14日没（真島秀行（2009）「関孝和三百年祭に明らかになったこと」：7）。しかし、永貞と関孝和が1640年代ぐらいで、永章（小十郎）が1661年生まれと20才近くも年の差がある。この女性が後妻であった可能性もあるのではないだろうか。

<sup>30</sup> 『過去帳』には、「天和二（1682）戊 三月二十九日 関新助母 茂菴貞繁」とあるが、猿渡盛厚（1956）『武州府中物語』36：10では、「茂菴貞繁信女」となっている。

#### 4.謝辞

『平安会』（磐城平藩士会）常任幹事の松井延之氏には、史料提供など、多大な便宜を頂いた。また、四家久央氏には、『泰翁様御代江戸高崎給帳』の提供を頂いた。

なお、四家久央氏には、上記の史料のほかに、四家家に伝わる『算用美取集日記』（四家勇吉、寛政10（1798）年）の記述に興味深いものがあった。



補図1 『算用美取集日記』 補図2 『算用美取集日記』3丁裏

『指明算法』や『算法統宗』などに載っている蘇州碼を「阿蘭陀符帳之事」としている。筆者は寡聞にして、このような呼び方を知らなかったが、地方和算期には、普通の呼び方だったのだろうか？享保年間に外国の書籍の管理が緩くなったが、どのような過程でいわき市まで流布したのか、今後の研究課題としたい。

#### 5.参考文献

堀田正敦（他編）（1799）、高柳光寿（他編）（1964-1967）『寛政重修諸家譜』26巻，続群書類従完成会。

田畑吉正（1809）『断家譜』、斎木一馬・岩沢愿彦（校注）（1969;1979）続群書類従完成会。

遠藤利貞(1896;1918;1960;1981)『日本数学史』（『増修日本数学史』）岩波書店;恒星社厚生閣。

三上義夫(1922;1999)『文化史上より見たる日本の数学』,岩波書店。

三上義夫(1932)「関孝和伝記の新研究の概要」『東京物理学校雑誌』488（1932年）:311-317,489（1932年）:340-347,490（1932年）:385-394。

林鶴一(1937)『林鶴一博士和算研究集録』2巻,東京開成館。

日本学士院(編)(藤原松三郎)(1954-1960;1979)『明治前日本数学史』5巻,野間科学医学研究資料館;岩波書店。

猿渡盛厚(1956)『武州府中物語』34,35,36,大國魂神社社務所。

平山諦(1959;1974)『関孝和』恒星社厚生閣。

平山諦・下平和夫・広瀬秀夫(編)(1974)『関孝和全集』大阪教育図書。

平山諦(1993)『和算の誕生』恒星社厚生閣。

- 村本喜代作(1963)『関孝和と内山家譜考』内山商事。
- 下平和夫(1965-1970)『和算の歴史』2巻,富士短大出版部。
- 新宿区史編集委員会(編)(1967)『新修新宿区史』新宿区史編集委員会。
- 斎木一馬・岩沢愿彦(校訂)(1969)『断家譜』続群書類従完成会。
- 山田悦郎(1979)「関孝和に関する3つの新資料」『和算』25:6-7。
- 小林龍彦・田中薫(1982)「関孝和と新井白石」『数学史研究』94:1-7。
- 鈴木寿(校訂)(1984)『御家人分限帳』年,近藤出版社。
- 朝倉治彦(監修)(1986)『江戸城下変遷絵図集』12巻,原書房。(沿革図書の復刻)
- いわき史料集成刊行会(1987)『いわき史料集成』
- 城地茂(2005)「関孝和の旧居」『(京都大学)数理解析研究所講究録』1444:73-88。
- 城地茂(2005)『日本数理文化交流史』台北:致良出版。
- 城地茂(2006)「関孝和と山路主住の接点-「甲府城内御金粉失役人御仕置一件」にみる関家断絶」  
『(京都大学)数理解析研究所講究録』1513:78-90。
- 城地茂(2006)「関孝和の伝記」『数学のたのしみ』2006年夏:46-66。
- 城地茂(2009)「関孝和の数学と勘定方の住居-「楊輝算法」『甲府様御人衆中分限帳』『御府内沿革図書』と『諸向地面取調書』にみる幕臣の感性」『(京都大学)数理解析研究所講究録』1625:160-178。
- 城地茂(2009)「関孝和伝記史料再考-関博物館蔵肖像画・「寛永12年関孝和略伝」・『断家譜』」  
『(大阪府立大学)人間社会学研究集録』4:57-75。
- 新宿区南山伏町遺跡調査団(編)(1997)『新宿区南山伏町遺跡調査報告書』警視庁。
- 鈴木貞夫(2000)『関孝和と内山家一主として牛込およびその周辺との関係』自家版(新宿区立中央図書館蔵)。
- 佐藤賢一(2003)「関孝和を巡る人々」『科学史研究』225:49-54。
- 鈴木武雄(2004)『和算の成立』恒星社厚生閣。
- 磐城平藩主安藤家入部二五〇年記念事業実行委員会(2006)『磐城平藩と安藤家展』いわき市:磐城平藩主安藤家入部二五〇年記念事業実行委員会。
- 佐藤健一・真島秀行(編)(2008)『関孝和の人と業績』研成社。
- 真島秀行(2009)「関孝和三百年祭に明らかになったこと」『数学史研究』200:5-15。
- 真島秀行(2009)「関新助孝和のある甲府分限帳の記載について」日本数学史学会創立50周年記念講演会。



藩主	官位	官職	生没年	藩主在任期間
小見川藩 <sup>31</sup>	安藤重信 <small>あんどうしげのぶ</small>	従五位下 対馬守	1557 - 1621	1611-1619
高崎藩 <sup>32</sup>	安藤重信			1619-1621
	<b>安藤重長<small>しげなが</small></b>	<b>従五位下 右京進<sup>33</sup></b>	<b>1600-1657</b>	<b>1621-1657</b>
	安藤重博 <small>しげひろ</small>	従五位下 対馬守	1640-1698	1657-1695
松山藩 <sup>34</sup>	安藤重博 <sup>35</sup>			1695-1698
	安藤信友 <small>のぶとも</small> <sup>36</sup>	従四位下 対馬守	1671-1732	1698-1711
加納藩 <sup>37</sup>	安藤信友		1711-1732、	
	安藤信尹 <small>のぶただ</small> <sup>38</sup>	従五位下 対馬守	1717-1771	1732-1755
	安藤信成 <small>のぶなり</small>	従四位下 対馬守 <sup>39</sup>	1743-1810	1755-1756
磐城平藩 <sup>40</sup>	安藤信成 <sup>41</sup>			1756-1810
	安藤信馨 <small>のぶきよ</small> <sup>42</sup>	従四位下 対馬守	1768-1812	1810-1812
	安藤信義 <small>のぶよし</small> <sup>43</sup>	従四位下 対馬守	1785-1844	1812-1829
	安藤信由 <small>のぶより</small> <sup>44</sup>	従四位下 対馬守	1801-1847	1829-1847
	安藤信正 <small>のぶまさ</small> <sup>45</sup>	従四位下 対馬守	1820-1871	1847-1862
	安藤信民 <small>のぶたみ</small> <sup>46</sup>	鱗之助	1859-1863	1862-1863
	安藤信勇 <small>のぶたけ</small>	従五位下 <sup>47</sup> 対馬守	1849-1908	1863-1871

### 付録 安藤家当主一覧

- 31 下総国小見川藩、16000石、陣屋。
- 32 上野国高崎藩、56000石、城主。
- 33 「良峯院殿（前京兆司録）天誉泰翁（大?）居士」と肖像画にある。
- 34 備中国松山藩、65000石、雁間詰、城主。
- 35 法号は「定恵院不嘔覚海」。
- 36 法号は「龍徳院殿賢誉秀儀溶哲大居士」
- 37 美濃国加納藩、65000石、雁間詰、城主。
- 38 法号は「義与仁讓興院」
- 39 侍従兼任。
- 40 陸奥国磐城平藩、67000石、雁間詰、城主。
- 41 法号は、法融院顕実意証得悟日準。
- 42 法号は、慈光院殿正円魏山口宗大居士。
- 43 法号は、最隆院殿憲誉遊岳道樹大居士。
- 44 法号は、宣照院殿光誉昶自徳大居士。
- 45 法号は、謙徳院殿秀譽松巖鶴翁大居士。公武合体論を進めた老中、坂下門外の変で有名。
- 46 法号は、孝懐院殿即誉哲心超世大童子。
- 47 後、従三位。法号は、大乘院殿信勇日照大居士。